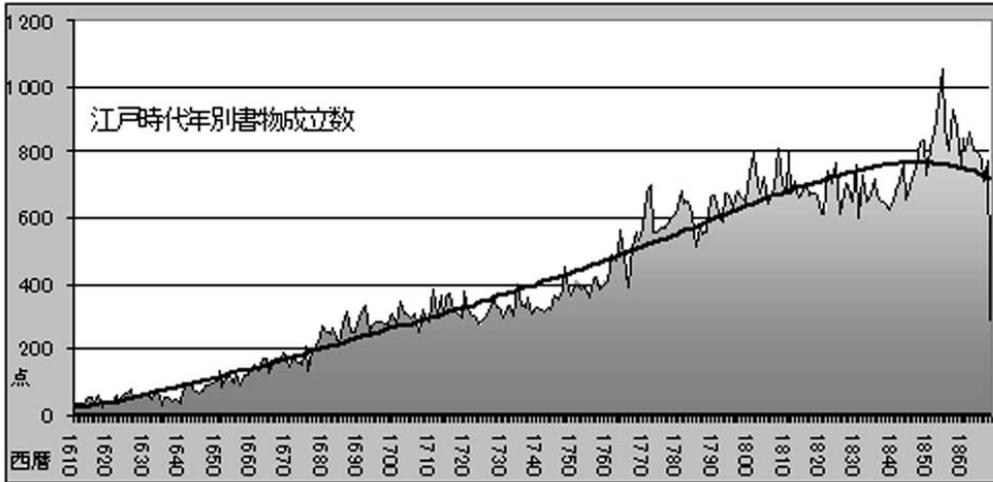


新版・ゆっくり学ぶ江戸の古文書

和本の世界 2 江戸・世界に冠たる出版王国を支えたもの

はしぐち こうのすけ
橋口 侯之介

江戸時代の出版量



45万点の和本データベース「日本古典籍総合目録」から成立年代の明確な10点を年代別に集計（『続和本入門』から）。なだらかな線は、近似曲線。傾向をあらわす

商業出版の成立

物之本とは、現代でいえば古典や学術書・専門書、宗教書のような硬派の本のこと。まず17世紀の江戸時代前期はこの分野で本屋が成り立った。

『伊勢物語』や『源氏物語』などの古典作品は、江戸時代に版本として商業出版されたことから幅広い層に広がり、一般に普及した。その役割は一部の専門家（文字を読み書きできる者（リテラシー））だけを対象とするのではなく、その入門者にまで層を広げたことにあった。この人たちを「中間的文化層」とか「中間読書人」といって注目されている。

板木が財産になる

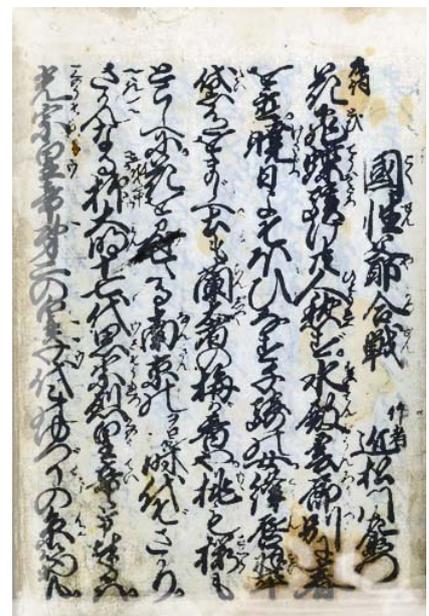
活字版は木版本のよさを再認識した。たしかに開板には手間や経費がかかるが、板木を保管することで、増刷ができ、長期間の発行を可能にした。息長く売ることによって、コストを吸収していくことができた（活字ではいったん組んだ文字をばらしてしまうので、再版はかえって手間がかかった）。

つまり板木を財産とすることで、長期の収益を確保しようとしたのである。したがって、板木を持つこと（蔵板という）が出版の表明であり、権利として認められた。これが江戸時代を通して出版活動の基本的形態になる。物之本とは、内容が「陳腐」にならないもの。板木やその権利さえあれば、百年、二百年単位で売られた。

草紙・大衆本の世界

〈本〉に対して、大衆向けで格が落ちるとされてきた本を草紙という。平安時代は、草子（冊子、草紙）だった『枕草子』や『源氏物語』などの古典は江戸時代になると物之本に格上げされ、かわって室町時代の小説（お伽草子）や当代（江戸前期）の書き下ろし小説は仮名草子といわれ、西鶴などの浮世草子も草紙とされた。

近松門左衛門作『国性爺合戦』正徳5年（1715）初演。浄瑠璃7行本。



草紙を出す店と、本屋はそれぞれ別に存在したが、江戸時代中期になると、仮名草子、浮世草子は本屋の側におさまり、草紙屋はさらに大衆本を出すようになった。それが浄瑠璃本である。

演劇とのコラボレーション

草紙屋のスタートは人形浄瑠璃の台本（正本しょうほんという）

を本にすることから始まった。それに絵を入れて劇場で見なくとも本で楽しめる趣向にした。

題材は室町時代からのお話、お伽草子が主体だったが、17世紀末になると近松門左衛門が登場し、書き下ろしの台本が生まれる。それがヒットし、そこから歌舞伎が発達する。歌舞伎も以前から上演されていたが、はじめは浄瑠璃の方が人気があった。しかし「現代劇」になると人形では物足りなく、演じる役者に人気が出てくる。以降は歌舞伎が演劇の主流となり、本も歌舞伎と組んで、お互いに人気を助長させていった。大衆本と演劇は切っても切れない関係である。錦絵の絵柄も大半は役者絵である。

活発な江戸の大衆本

江戸では、草紙屋じほんどうやを地本問屋ともいった。江戸開府から150年たった18世紀中頃以降盛んになる。その代表格が鱗形屋うろこがたやという本屋。

ここは江戸の先導役として、17世紀末から大衆向けの本を出してきた。始めは題材はお伽話など子供向けで、安いものだった。表紙の色で、赤本・黒本などという。18世紀の中頃から出はじめた黄表紙まげまじりから、内容も大人向けの娯楽小説になっていき、山東京伝、曲亭馬琴などの流行作家が生まれていく。

しかし鱗形屋の活躍はここまでで、次の世代・蔦屋重三郎つたやじゅうざぶろうが登場する。

遊里を題材にした読み物・洒落本、ガイドブックというべき「吉原細見」で稼ぎ、黄表紙作家を育てて大衆本界を引っ張った。浮世絵画家も開拓し、錦絵として売り出す一方、本の挿絵も描かせた。

赤本・黒本や黄表紙を別名、草双紙くさざうしともいった。紙も漉き返し*を使い一冊は五丁だでの薄い本で、かなり安く売った。文化文政頃までは一冊十文ならず。今なら二、三百円程度だった。

しかし、話がおもしろく続きが読みたい、もっと込み入った話がいい、と読者の要望も高まり、五丁だて三冊セットの黄表紙では物足りなくなってくる。そこで、19世紀になると、より長編化したシリーズとして合巻ごうかんが誕生する。

文政17年から刊行を開始した柳亭種彦『修紫田舎源氏』(右画像)はその代表作。天保の改革で発禁処分。

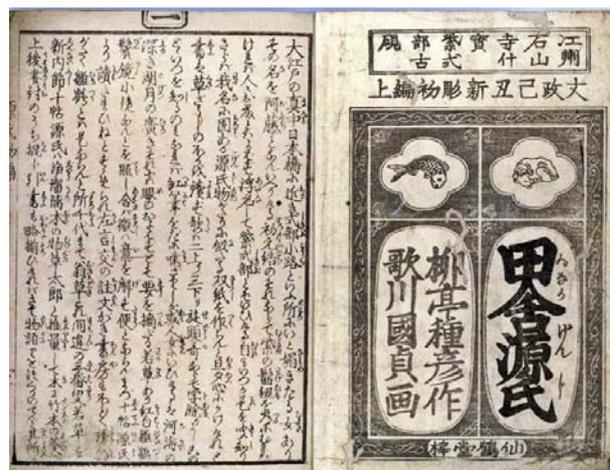
取締りの強化と江戸後期の大衆本

書物の発展、とくに大衆本の浸透は、庶民の生活に余裕ができ始めたことも重要。田沼意次の時代は経済が発展していった。しかし、日本に夏が来ない、といわれたほどの寒冷化がおき、天明の飢饉になってしまい、田沼は失脚する。

寛政の1780年代に松平定信が老中となっておこなった財政再建政策が「寛政の改革」。質素儉約が奨励されたが、同時に風俗取締、異学の禁にも厳しく乗り出した。

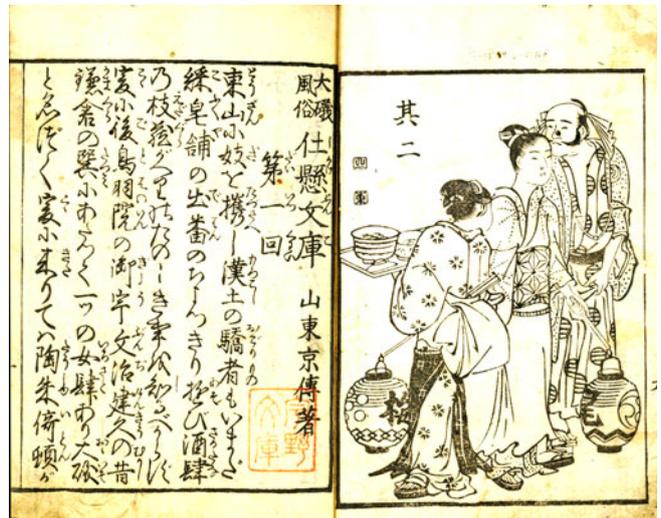


八文字屋八左衛門板『役者一会桜 京之巻』。役者の評判記。すなわち今の芸能雑誌のようなもの。八文字屋は京都の草紙屋である



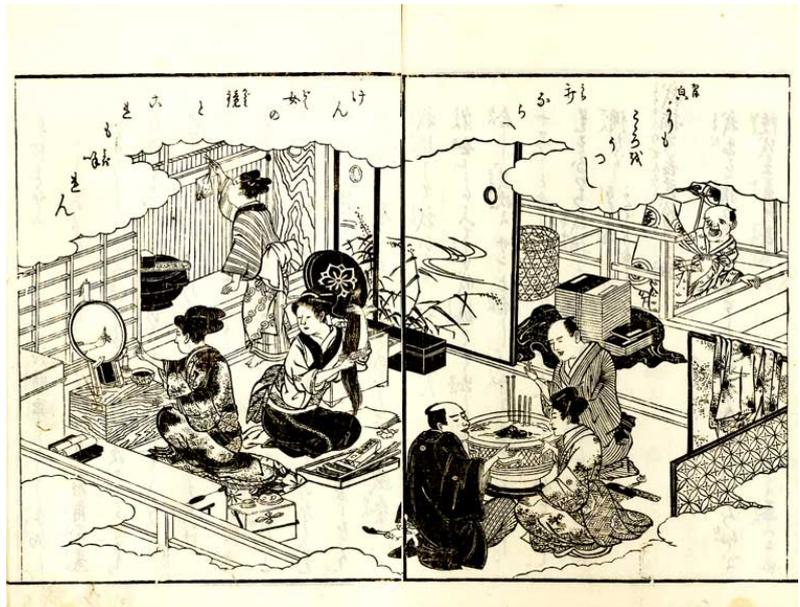
やり玉にあがったのが、洒落本。山東京伝に手鎖 50 日、蔦屋重三郎は身上半分没収の処分。一寛政の改革で発禁処分を受けた山東京伝の洒落本『仕懸文庫』

このほか、さまざまなジャンルのいわば文芸書が多数出版されるのが、江戸時代後期の特色である。
合巻などの草双紙のほか、人情本、咄本、滑稽本、読本などがあり、これらはエンターテイメント性が高い読み物である。読本は、物之本屋側からの大衆化である。



巷を歩く貸本屋

本の流通は、物之本では三都（京・大坂・江戸）に限られた本屋が握っていたが、大衆本である草紙の類は零細だが全国にあった貸本屋たちが広めた。
物之本屋がじっくり本をつくるのに対して、草紙屋は「生き馬の目を抜く」勢いがあつたが、悪く言うと「粗製乱造」でもある。次から次へと目先を変えて新刊本を売った。とくに合巻の時代になると、二冊セットの値段が百文を超えて（二、三千円くらい）、庶民が買うには高すぎる。そこで貸本屋が活躍した。



江戸だけでも六百軒の貸本屋が記録されている。多くは風呂敷包みを背負って顧客の家に持ち込む

本の挿絵にある貸本屋。イケメンの若い男が風呂敷包みをあけて話し込んでいる。あとから風呂敷を背負った男が階段をあがって待っている。

行商である。出版元もこの需要に左右され、人気のバロメーターにしていた。さらに丁子屋兵衛などのように貸本屋が自ら出版に乗り出した。

女性に人気の人情本

江戸期の小説はパロディのおかしさを滑稽に仕立てたものが多く、笑いが好きだった。同時に悲劇好き。悲恋をテーマにしたのが人情本で、「泣き本」の異名がついた。為永春水が代表作家。その作品に天保3年（1832）の『春色梅暦』があった。これは女性の読者に広がった。読み書きは、男女の区別なく教えられ、それが高い識字率につながった。



江戸文学の基本－滑稽

江戸文学を特徴づけるのはパロディと滑稽といってもよい。

代表的な滑稽本式亭三馬の『浮世風呂』

パロディは元の話を知っていればいるほどおもしろい。レベルの高い遊びである。

封建制度＝暗くて貧しい社会という図式でなく、実際の庶民の風俗を見てみると、「楽しく生きる」ことを目指しており、笑いがあふれていたように思える。事実、滑稽本というジャンルもできるほどである。

寺子屋の役割

江戸時代の後期に、こうした大衆本の繁栄があったのは読者層が大幅に拡大されたからである。

その役割を果たしたのが、寺子屋での教育。寺子屋とは、私的な塾であり、そこで読み書きやそろばんを教えた。全国すみずみまでに存在していた。また、そのための教科書（^{おうちもの}往来物）が多数発行された。

男女を問わず幼児から青年まで、商人や職人、農民にもすべての層に向けてきめ細かく出していた。



往来物のひとつ『小野篁歌字尽』（おののたかむらうたじづくし、右）は、和歌の文字を部首やテーマ順に並べて学ぶようになっている。それをもじって式亭三馬がつくった『小野愚嘘字尽』（おののばかむらうそじづくし、左）。前者の形式で嘘字を滑稽に並べて遊んでいる。いずれも欄外の頭部分には本文と関係なく、絵をいれた「物知り辞典」のようにしてある。パロディはそこも遊んでいる。

*紙の話

和紙は美濃が産地として古く、全国流通していた。しかし、関東地方では遅れた。

文化の中心として京都が長く歴史的な役割を果たしてきたのを、権力基盤の移行だけでは簡単に江戸にも伝わるといえるものではなかった。江戸の出版が遅れたのはそのためだが、出版に欠かせない紙の供給も遅れていた。そのため、漉き返しというリサイクルの紙を使わざるをえなかった。浅草がその産地で浅草紙と呼ばれていた。関東の地回りで紙が十分に供給できるようになるのは、18世紀に入ってからである。

そのほか、廻船による運送の発達、為替を用いた遠隔地との金銭のやり取りなどの仕組みなどが整って初めて出版が産業として成り立ったのである。

和本は現存する全体が文化遺産

個々の文化財指定とは異なる保存のための方策をとるべきである。同時に、ハードとしてのものを残すだけでなく、ソフトというべき知識もいっしょに後世に伝えることが大事。理解を深めてほしい。

参考文献

中野三敏編『江戸の出版』（2005、ペリカン社）
鈴木俊幸『葛屋重三郎』（1998、若草書房）

橋口侯之介 参考文献

『和本入門—千年生きる書物の世界』（2005、平凡社、2011年9月「平凡社ライブラリー」再版）
『続和本入門—江戸の本屋と本づくり』（2007、平凡社、2011年10月「平凡社ライブラリー」再版）
『和本への招待—日本人と書物の歴史』（2011、角川選書）